

## 過去のことを表すフランス語時制\*

曾 我 祐 典

### 0. はじめに

話し手は、発話時点を中心とする現在という広がり（以下、「現在スペース」）にいるという意識をもっている。そして、その意識を保ったまま、なんらかのきっかけである過去の場面（以下、「過去スペース」）を想起してそこにいる気持になることがある<sup>(1)</sup>。

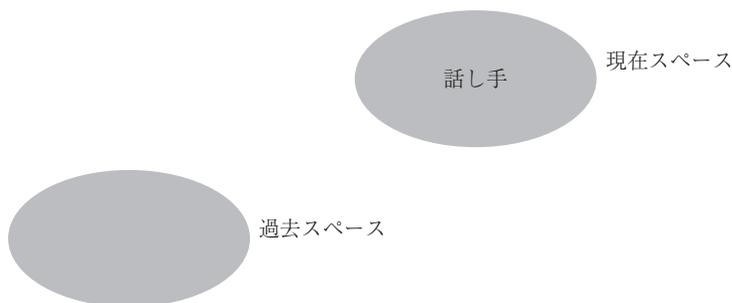


図 1

本稿では、過去スペースにいる気持の話し手がさまざまな事態を表すときに動詞時制をどのように選んでいるかを明らかにすることをめざす。以下では、時制選択のしくみを概観し<sup>(1)</sup>、過去スペースにいる話し手がそこにある事態またはそれより前または後の事態を表すときの時制選択のしくみを考える<sup>(2, 3)</sup>。なお、本稿に示す発話例のうち出典を記していないものはインフォマンの協力を得てわれわれが作成したものである<sup>(2)</sup>。

## 1. 現在スペースと過去スペース

多くの発話例を検討すると、時制の選択は次の3つの区別に左右されることが分かる。

- (1) a. 話し手がいるのが現在スペースか過去スペースか。
- b. 事態があるのが話し手のいるスペースかそれより前か後か。
- c. 事態が含む行為の完了結果が話し手のいるスペースにおいて問題か否か。

本稿にいう「行為」とはフランス語学で広く「事行 *procès*」と呼ばれているものに相当し、一般に動詞で表すものである。ある行為について「完了する」というのは、開始から終了までの全過程が実現することである。そして、「行為の完了結果が問題」というのは、(2)、(3)のような場合について言えることである。

(2) *Léa n'est pas là. Elle est sortie.*

(3) *Elle a enseigné le français à Kyoto pendant 6 ans.*

(2)の話し手は、レアの現在スペースにおける「外出した結果 (= 不在)」を伝えている。(3)の話し手は、ある教員の現在スペースにおける「京都で6年間フランス語を教えた結果 (= 教歴)」を伝えている。フランス語では、行為の完了結果は複合形によって表す。逆は真ではなく、複合形によって完了結果以外(以下、必要に応じて「非完了」)の行為を表すこともある。たとえば、*Elle est sortie hier.*の複合過去は、「外出する」という非完了の行為が過去において生起したことを表す。一方、単純形は、「眠っている(行為が展開中 = 未完了)」「働く(行為が生起 = 総括的)」「飲む(行為が繰り返して生起 = 反復)」などを表すときの現在形使用(*elle dort en ce moment; aujourd'hui elle travaille de 8 heures à 14 heures; elle boit tous les soirs*)からも分かるように、非完了のさまざまなアスペクト価値を担いうる。

以下では、本稿の立場からは認めがたい「discoursの半過去」と「叙想的

テンス用法」を紹介した後に、話し手が現在スペースにいる場合と過去スペースにいる場合の時制選択のしくみを概観する。

### 1.1. 通常の発話モードにおける半過去のはたらき

発話モードとしては、通常モード (*discours*) と語りモード (*récit*) の二つが区別できる。周知のとおり、語りモードの場合は現在スペースが棚上げになる。

通常モードの場合、話し手はつねに現在スペースにいるという意識を保っている。そして、ある過去スペースにいる気持になってそこから捉える事態を表すことも、過去スペースにいるだれかがそこから捉える事態を表すこともある<sup>(3)</sup>。過去スペースから現在スペースに戻ることもよくあり、(4)、(5)のようにそれが一つの発話の中に見られることも珍しくない。

(4) M. Birmann qui *était* professeur à la faculté des lettres quand j'étais étudiant *l'est* toujours.

(5) A l'époque j'*aimais* Françoise à la folie exactement comme j'*aime* Léa en ce moment.

通常モードにおける半過去のはたらきについては、Le Guern (1986: 27) に次のような記述が見られる。

Dans le cas du discours, l'imparfait indique en même temps que la proposition est présentée comme ayant été vraie à un moment du passé, et que sa vérité est niée pour le moment où se situe l'énonciation. Dans l'énoncé "Pierre, qui était mon voisin au Canada, vient dîner ce soir.", l'emploi de l'imparfait "était" marque que Pierre a été le voisin du locuteur à une époque antérieure, mais qu'il ne l'est plus.

「discours の半過去」は事態が過去のある時点において真であったが現在はそうでないことを表すという説であり、その例が Pierre, qui *était* mon voisin au Canada, vient dîner ce soir. というわけである。しかし、半過去で表す事

態が過去のある時点において真であったが現在はそうでないというのは含意にすぎない。実際、対話場面や文脈によって「現在スペースでも真である」という解釈が促されることは少しも珍しくない。その例が (6), (6') であり、上の (4) である。

(6) [カナダに2度目の長期留学をしているフランス人学生が一時帰国して]

Pierre, qui *était* mon voisin au Canada il y a deux ans, est de nouveau mon voisin depuis la rentrée.

(6') Pierre, qui *était* mon voisin à l'époque, l'est resté en dépit des circonstances et il vient dîner ce soir.

## 1.2. 「叙想的テンス用法」の半過去

ここで、東郷 (2014) を紹介しておこう。東郷は、Le Guern (1986) と渡邊 (2012) に近い立場から「半過去形には次のように、どう考えても過去とみなすことのできない事態を表す用法が話し言葉のフランス語にある」と述べて (7), (8) のような発話例を 9 つ示している (pp.45-47)<sup>(4)</sup>。

(7) [待っていた人を柱の陰に発見して]

Ah, vous *étiez* là. (東郷 2014 の (2 a))

(8) Zut ! Demain, *c'était* l'anniversaire de ma fille. (東郷 2014 の (2 c))

そして、それらを「叙想的テンス用法」の半過去であるとし、その特徴として a-c をあげている (p.61, 下線は原著者, c は後半を省略)。

- a. 過去に視点を移動せず、発話時現在に視点を置いて過去の事態を眺める discours の半過去の一部である。
- b. zone 1 と zone 2 の両方を発動させ、話し手は何らかの意味での過去と現在の断絶を意識している。このため過去と現在の対比を含意し、事態成立の「発見」「失念」「確認」や「予定の破棄」などの意味効果をもつ。
- c. zone 1 と zone 2 の断絶は動詞の表す事態レベルのものではなく、

話し手による事態成立の認識に関わるものである。

本稿では、半過去に「叙想的テンス用法」を認めない立場を採る（2.2.2.と3.2.2.）。

### 1.3. 現在スペースにいて捉える事態

話し手が現在スペースにいて捉える事態は、現在スペースにあることがある。事態はまた、現在スペースの外にあることもある。すなわち、現在スペースより前（図2の左の★）または後（右の★）にあることもある。発話例の観察から、それらの事態を表すときに用いる時制は図2に示すとおりであると言える。



図2

話し手は、現在スペースにある、行為が非完了の事態を表すときは現在形を用いる。事態が含む行為の完了結果が問題であれば（9）、（10）のように複合過去を用いる（完了用法）。

（9） *Elle ne peut pas conduire parce qu'elle a bu.*

（10） *Le comptable est rentré de vacances et ça va mieux au bureau.*

（9）の話し手は「飲んだ結果（＝酒が入っている状態）」を、（10）の話し手は「休暇から戻ってきた結果（＝職場にいる状態）」を、それぞれ問題にしている。

発話時点の直前または直後に生起して発話時点の物事のありかたに深くかかわる事態も、現在スペースの事態として（11）、（12）のように現在形で表す。

（11） A: *Elle a l'air en forme.*

B: *C'est normal. Elle rentre de vacances.*

(12) *Je suis déjà en retard. Je m'en vais.*

さらに、やがて生起することが現在スペースにおいて確定している事態を表すときも (13) のように現在形を用いる。行為の完了結果が問題であれば (14) のように複合過去を用いる。

(13) a. *Demain je reçois mes beaux-parents chez moi.*

b. *Elle prend sa retraite à la fin de l'année prochaine.*

(14) *Dans trois jours nous avons fini les travaux. Vous pourrez donc emménager dès vendredi.*

話し手が (13), (14) によって言及する「明日 (来年の終わりに, 三日後に) かれこれの事態が生起する, ある」ということは、やがて生起することが現在スペースにおいてすでに定まっていて現在スペースの物事のありかたに深くかかわっている。それらは現在スペースの事態にほかならず、現在形・複合過去で表すことに不思議はない。

話し手は、現在スペースにいて、そこから捉える過去の出来事 (行為は非完了の一つである総括的アスペクト) を表すときにも複合過去を用いる (先行用法。例: *Elle est sortie hier.*)。完了用法と先行用法を支える複合過去の基本的機能は「現在スペースまでに行為が完了していること (= 現在スペースまでに行為の開始から終了までの全過程が実現していること)」を表すことであると考えられる。

話し手はまた、現在スペースにいて、そこから未来方向を展望して想起する事態を表すことがある。多くの場合、それらは推測・意志などの対象である事態で、未来形で表す。ただし、行為の完了結果が問題であれば前未来で表す (完了用法)<sup>(5)</sup>。

#### 1.4. 過去スペースにいて捉える事態

話し手は、なんらかのきっかけである過去スペースを想起してそこにいる気持になることがある。過去スペースにいる気持になっている話し手が捉える事態は、過去スペースにあることもそれより前 (図 3 の左の★) または後 (右

の★)にあることもある。発話例の観察から、それらの事態を表すときに用いる時制は図3に示すとおりであると言える。



図3

過去スペースにいる気持の話し手は、そこにある事態を半過去で表すことがある。半過去は、現在形と同じく、未完了（展開中）、総括的（生起）、反復（繰り返し）など非完了のさまざまなアスペクト価値を担う。一方、行為の完了結果が問題であれば（9'）、（10'）のように大過去で表す（完了用法）。

（9'） *Elle ne pouvait pas conduire parce qu'elle avait bu.*

（10'） *Le comptable était rentré de vacances et ça allait mieux au bureau.*

話し手はまた、ある過去の出来事をきっかけにその直前または直後の場面を想起してそこにいる気持になり、そこにある、出来事に深くかかわる事態を表すことがある。そのときも（15）、（16）のように半過去を用いる。

（15） *Hier j'ai vu Clarisse. Elle rentrait de vacances.*

（16） *Ma femme s'est changée vers sept heures ; les invités arrivaient.*

過去スペースにいる気持の話し手がそこから捉えるそれより過去の出来事（過去スペースより前の事態）は大過去で表す（先行用法）。たとえば「彼女が独りで暮らしていた」という事態のある過去スペースより前の「離婚した」という出来事（行為は総括的＝非完了）は、（17）のように大過去で表す。

（17） *Elle vivait seule. Elle avait divorcé l'année précédente.*

完了用法と先行用法を支える大過去の基本的機能は「過去スペースまでに行為が完了していること（＝過去スペースまでに行為の開始から終了までの全過程が実現していること）」を表すことであると考えられる。

話し手は、過去スペースにいる気持になっているときにそこから未来方向を展望して想起する事態を(18)のように過去未来形(条件法現在)で表す。ただし、行為の完了結果が問題であれば(19)のように過去前未来(条件法過去)で表す(完了用法)<sup>(6)</sup>。

(18) *Je pensais qu'elle quitterait le poste le mois suivant.*

(19) *Elle leur a répondu que, quand ils arriveraient au bureau le lendemain, elle aurait préparé le dossier.*

話し手が表すのが過去スペースにある事態の場合の時制選択について、2と3でより詳しく論じよう。

## 2. 過去スペースにいて捉える過去スペースの事態

以下では、話し手が過去スペースを想起するきっかけになるのが過去の事物であるか現在の事物であるかに分けて発話例を検討しよう。

### 2.1. 過去の事物をきっかけに想起する過去スペース

過去スペースを想起するきっかけになる過去の事物は、(20)、(21)のように先行文脈に出てきた過去の出来事であることが多い。

(20) A: *Tu te souviens de ce dîner chez Yann ?*

B: *Oui, bien sûr. Elise en était. Elle voulait me faire rencontrer son frère.*

(21) [小説家 A にジャーナリスト B がインタビューしている]

A: *J'ai écrit mon premier roman à vingt-cinq ans.*

B: *Oui. Vous étiez alors professeur d'allemand dans un lycée parisien.*

きっかけになる事物はまた、(22)、(23)のように対話場面にある、なんらかの意味で過去の世界に属す人物像や物のこともある。

(22) [相手に古い写真を見せて]

Ce sont mes parents. Ils *étaient* jeunes. Ils *vivaient* à Lisbonne.

(23) [友人と歩いているときに、かつて通っていた小学校が目に入って]

C'est mon école primaire. A l'époque j'*habitais* une rue située plus loin, chez mes grands-parents.

(20)–(23) の場合、話し手は、相手 (A) の発言に出てきた過去の出来事または対話場面にある過去の人物像・建物をきっかけに想起する過去の場面にいる気持ちになって、その過去スペースにある事態を半過去で表している。

## 2.2. 現在の事物をきっかけに想起する過去スペース

### 2.2.1. きっかけ：先行文脈に出てきた現在の事態

過去スペースを想起するきっかけは、先行文脈に出てきた現在の事態であることも珍しくない。たとえば (24) の話し手は、まず、生活費が高くなっている現状を表す。

(24) La vie est devenue terriblement chère à Paris. Tu sais, le loyer de ma chambre d'étudiant ne *s'élevait* même pas à 300 euros.

そして、その現状との関連である過去の場面を想起してそこにいる気持ちになり、その過去スペースにある「家賃が 300 ユーロにさえ達しない」という事態を半過去で表している。それによって、現状の評価がしかるべき根拠にもとづくものであることが伝わるようにしている。

また、(25) の対話場面には A の発言から分かる「話し手 B の来訪を A が喜んでくれている」という現状がある。(26)、(27) の対話場面でもそれぞれ A または Maigret の発言から分かる現状がある。

(25) A : Ça me fait plaisir que tu sois venu.

B : Je *voulais* venir avant mais ...

(26) A : L'obtention du visa est très compliquée. C'est éprouvant.

B : C'*était* exactement pareil il y a dix ans.

(27) Maigret : J'ai une nouvelle importante à vous annoncer. On a retrouvé votre mari dans la Seine, au pont de Grenelle ...

Nathalie : *Je savais bien qu'il lui était arrivé quelque chose ...*

(G. Simenon 1972, *Maigret et monsieur Charles*, Folio : 100-101)

(25) の話し手 B は、現状との関連である過去の場面を想起してそこにいる気持になり、その過去スペースにある「来る意志がある」という事態を半過去で表している。それによって、来ないでいたのが自分の意志ではなかったことを分かってもらおうとしている。(26), (27) の話し手 B, Nathalie も、それぞれ現状との関連で想起する過去スペースにいる気持になって、そこにある事態を半過去で表している。それによって、(26) の B は手続きというものが簡略化されないものであることを伝えようとし、(27) の Nathalie は自分の洞察力を Maigret に認めさせようとしている。

### 2.2.2. きっかけ：対話場面にある事物

過去スペースを想起するきっかけは、対話場面にある事物のこともある。たとえば (28) の場合は、話し手 Pénélope にとって、Vic がやって来たのでもう待たなくてよいという現状がある。(29) の対話場面には、思いがけず相手の姿を認めた話し手にとって、相手がソウルにいるとはもう思っていないという現状がある。

(28) Vic : Ben, qu'est-ce que tu fais là ?

Pénélope : *Je t'attendais. J'ai les jetons de monter toute seule.*

(film de Cl. Pinoteau 1980, *La boum*)

(29) Ah, ça alors ! Je vous croyais à Séoul !

どちらの話し手も、現状との関連で想起する過去スペース（直前までの過去スペース）にいる気持になって、そこにある「相手を待っている」または「相手がソウルにいると思っている」という事態を半過去で表している。それによって、(28) では現状を望んでいた理由（ひとりで行動するのは心細い）が言えるように、(29) では予想に反する相手の所在に反応していることが伝わるように、それぞれしている。

(30) の対話場面には、話し手が希望していた面会が実現しそうになってい

るという現状がある。

(30) [やっと会ってもらえることになった相手に]

*J'avais un peu peur que vous ne me receviez pas.*

話し手は、現状との関連で想起する、直前までの過去スペースにいてそこにある「会ってもらえないのではないかと心配だ」という事態を半過去で表し、現状を喜んでいることが伝わるようにしている。

(31), (32) は半過去の例ではないが (7) の類例である。(31) の場合は、話し手が予想より早い相手の到着をいまや知っているという現状がある。(32) の対話場面にいる Catherine は 38 歳になっても少女の姿を保っていて、そのことを指摘する Annie に初耳だという反応を示す。そこで、だれも Catherine に指摘していなかったらしいと Annie が思うという現状がある。

(31) [会場に思ったより早く着いていた人たちに気づいて]

*Ah, vous étiez arrivés.*

(32) Catherine : Ah, bon ?

Annie : On ne te l'avait jamais dit ?

(A. Wiazemsky 1991, *Marimé* : 86)

どちらの話し手も、現状との関連で想起する、直前までの過去スペースにいる気持になっている。そして、(31) では、完了結果が問題である行為を含む「相手が着いている」という、そこにある事態を大過去で表して、直前まで知らないでいたことを意外に感じていることが伝わるようにしている。(32) では、完了結果が問題である行為を含む「これまでそのことを誰にも言われたことがない」という、そこにある事態について大過去で確認を求めて、自分が指摘するまでだれにも指摘されないでいたことに驚いていることが伝わるようにしている。

東郷 (2014) が「叙想的テンス用法」の半過去として示している 9 つの発話例のうちの 3 つは、ここで論じている「対話場面にある事物をきっかけに想起する過去スペースにある事態」に該当すると考えられる。実際、(33) の対話場面には相手がそこにいることが分かっているという現状がある。

(33) (=7) [待っていた人を柱の陰に発見して]

Ah, vous étiez là. (東郷 2014 の (2 a))

話し手は、現状との関連で想起する過去スペース（直前までの過去スペース）にいて、そこにある「相手がそこにいる」という事態を半過去で表し、直前まで気づかないでいたことを発話時点において意外に感じていることが伝わるようにしている。

また、(34)、(35)の対話場面には記憶が不確かになっていることについて確認したいという現状がある。

(34) [人の名前をどうしても思い出せなくて]

Comment il s'appelait déjà ? (東郷 2014 の (2 b))

(35) Dis ! Vendredi tu ne devais pas aller à Paris ? (東郷 2014 の (2 i))

話し手は、現状との関連で想起する、ある人物の名前または相手のバリ行きの予定を確かに知っていたはずの過去スペースにいて、そこにある事態について疑問を発している。それによって、確認を求めているのが知っていたはずのことについてであることが伝わるようにしている。

2.2.1. と 2.2.2. で見てきた発話例の事態は、(24)、(25)、(28)–(30) などの場合は現在スペースにないが、(26)、(27)、(31)、(33)、(34) などの場合は現在スペースにもある。そのことは、1.1. で紹介した *Le Guern* の「通常モードの半過去が表す事態は現在はない」という説が誤りであることを示している。また、それらの発話例において半過去を用いるのは話し手が表すのが過去スペースの事態だからであると説明できる。「叙想的テンス用法」を考える必要はないということになる。

### 3. やがて生起することが確定している事態

1.3. で見たように、やがて生起することが現在スペースにおいて確定している事態を表すときは、(13)、(14) のように現在形・複合過去を用いる。それと同じように、やがて生起することが過去スペースにおいて確定している事態

を表すときは、(13')のように半過去を用いる。行為の完了結果が問題であれば(14')のように大過去を用いる。

(13') *Le lendemain je recevais mes beaux-parents chez moi.*

(14') *Trois jours après nous avions fini les travaux.*

話し手が(13'), (14')によって言及する「翌日(その三日後に)かれこの事態が生起する、ある」ということは、やがて生起することが過去スペースにおいてすでに定まっていた過去スペースの物事のありかたに深くかかわっている。それらは過去スペースの事態にはかならず、半過去・大過去で表すことに不思議はない。

以下では、この種の発話例を、話し手が過去スペースを想起するきっかけが過去の事物である場合、現在の事物である場合に分けて検討しよう。

### 3.1. 過去の事物をきっかけに想起する過去スペース

過去スペースを想起するきっかけになる過去の事物は、多くの場合、先行文脈に出てきた過去の出来事である。たとえば、(36), (37)の話し手Bは、Aの発言に出てきた出来事をきっかけに想起した過去スペースにいる気持になって、やがて生起することが確定している事態をそれぞれ *parce que* の節、補足節において半過去で表している。

(36) A: *Tu n'es pas venu à la fête dimanche.*

B: *Je n'étais pas d'humeur à m'amuser parce que le lendemain je passais mon permis de conduire.*

(37) A: *Tu as vu Isabelle récemment ?*

B: *Oui. J'ai appris qu'elle partait en retraite à la fin du mois prochain.*

行為の完了結果が問題であれば、大過去で表すことは言うまでもない。

(38) [竣工状態]

*Hier le maître d'œuvre me l'a bien garanti. Les ouvriers avaient bientôt terminé les travaux, et je n'avais pas de souci à me faire.*

## (39) [提出してある状態]

Hier, je l'ai vue rédiger le rapport avec application. C'était sûr, elle l'avait remis dans les trois jours.

**3.2. 現在の事物をきっかけに想起する過去スペース**

過去スペースを想起するきっかけになる現在の事物として考えられるのは、先行文脈に出てきた事態または対話場面にある事物である。

**3.2.1. きっかけ：先行文脈に出てきた現在の事態**

過去スペースを想起するきっかけが先行文脈に出てきた現在の事態である例は (40) のようなものである。対話場面には、A の発言内容から話し手 B にとって「マラソンが無いことになってしまった」という現状がある。

(40) A: Tiens, il y a les Duculot qui ont téléphoné ; ils voudraient venir nous voir dimanche prochain.

B: Zut ! Dimanche prochain, il y avait un petit marathon sympa à Rome.

(J. Lebaud 1993 : 168 を改変)

話し手 B は、現状との関連である過去の場面を想起してそこにいる気持になり、その過去スペースから捉える「日曜にマラソンがある」という、生起が確定している事態を半過去で表している。それによって、その後に物事の嘆かわしい (Zut !) 変化があったことが伝わるようにしている。

**3.2.2. きっかけ：対話場面にある事物**

こんどは、過去スペースを想起するきっかけが対話場面にある事物の場合である。たとえば (41) の対話場面には相手の振る舞いから大臣にインタビューする予定を確認したくなっているという現状があり、(42) の対話場面には独りで夕食をとることになって気落ちしている相手を元気づけたいと思っているという現状がある。

(41) Tu es encore là ? Tu n'interviewais pas le ministre dans une heure ?

(42) J'avais un rendez-vous mais je vais l'annuler pour dîner avec toi.

(A. Wiazemsky 1993, *Canines* : 158)

(41) の話し手は現状との関連で想起する、相手の予定を把握していたはずの過去スペースにいる気持になってそこから捉える「大臣にインタビューすることになっている」という、生起が確定的な事態を半過去で表し、確認を求めているのが把握していたはずの予定についてであることが伝わるようにしている。同様に、(42) の話し手は「これから人に会う約束がある」という、生起が確定している事態を半過去で表し、それを取り消して相手と夕食をともにする話につなげている。話し手にとってその約束はもはや無いのである。

東郷 (2014) が「叙想的テンス用法」の半過去として示している 9 つの発話例のうち、2.2.2. で見た (33) - (35) 以外の 6 つは、ここで検討している「対話場面にある事物をきっかけに想起する過去スペースから捉える、生起が確定している事態」に該当すると考えられる。実際、(43) の対話場面には娘の誕生日を遅まきながら思い出しているという現状があり、(44)、(45) の対話場面には情報を確認したいと思っているという現状がある。

(43) (=8) Zut ! Demain, c'était l'anniversaire de ma fille. (東郷 2014 の (2c))

(44) [空港で飛行機を待ちながら]

Ton avion partait à 16 h 30. (東郷 2014 の (2d))

(45) C'est bien vous qui parliez lors de la prochaine réunion ? (東郷 2014 の (2f))

(43) の話し手は、現状との関連で想起する、誕生日を覚えていた過去スペースにいる気持になって、そこから捉える「いついつが娘の誕生日だ」という、生起が確定している事態を半過去で表し、遺憾なことに (Zut !) 発話時点の直前まで忘れていたということが相手に伝わるようにしている。(44)、(45) の話し手は、現状との関連で想起する、情報が確かであった過去スペースにいる気持になって、そこから捉える「相手が乗る飛行機が 16 時半発だ」、「会合

で話すのが相手である」という生起が確定している事態を半過去で表し、確認を求めているのが相手と共有した情報についてであることが伝わるようにしている。

次の(46)–(48)の話し手は、過去スペースにおいて生起が確定していたが現在スペースには無い(または無いにひとしい)事態を表している。(46)、(47)の対話場面には、前にはあった予定が無くなっているという現状がある。(48)は(40)、(42)の類例で、対話場面には、行かないことにした試合が話し手にとって無いにひとしいという現状がある。

(46) Demain, j'attendais le préfet de police et M. Weber. (東郷 2014 の (2 e))

(47) [ラジオでヴァイオリニストの急死を報じ、続けて]

Demain, c'était son concert d'adieu à Copenhague. (東郷 2014 の (2 h))

(48) Lundi prochain, il y avait un match ; mais je n'irai pas. (東郷 2014 の (2 g))

話し手は、現状との関連で想起する過去スペースにいる気持ちになって、そこから捉える「二人を迎えることになっている」、「コンサートが予定されている」、「試合がある」という事態を半過去で表し、その後の物事の推移を伝えようとしている。

#### 4. おわりに

本稿では、話し手がある過去スペースにいる気持ちになっている場合にそこから捉えるさまざまな事態を表すときの時制選択のしくみを明らかにすることをめざした。発話例の分析にもとづいて、2で過去スペースにある事態を表すときは半過去(行為の完了結果が問題であれば大過去)を用いることを見た。また、3でやがて生起することが過去スペースにおいて確定している事態も過去スペースの事態にほかならず、それらを表すときも半過去(行為の完了結果が

問題であれば大過去) を用いることを見た。

話し手が半過去を選ぶのは (49) に示す a-c の要因が重なる場合であることになる。

(49) 半過去を選ぶ場合

- a. 話し手が過去スペースにいる気持になっていて、そこから事態を捉える。
- b. 事態があるのが過去スペース。
- c. 事態が含む行為の完了結果が問題でない (行為が非完了)。

また、大過去を選ぶのは、(49) の b が「事態があるのが過去スペースより前」の場合 (先行用法) または c が「事態が含む行為の完了結果が問題」の場合 (完了用法) であることになる。

東郷 (2014) が「叙想的テンス用法」の半過去として示している発話例は、(49) に該当する通常の半過去の例である。事態が過去スペースだけでなく現在スペース以降にもある場合に、2.2.2. と 3.2.2. で見たように、話し手はなんらかの語用論的な動機から半過去・大過去を用いて過去スペースの事態の方に言及するのである。この表現法は、いわゆる「語調緩和の半過去」に通じるものがある。こちらは、曾我 (2007, 2011) に述べたように、相手にとって「脅威」になりかねない事態が現在スペースにも過去スペースにもある場合に過去スペースの事態の方に半過去で言及することによって相手にとっての「脅威」を緩和する用法であると説明することができる。

本稿で明らかにした時制選択のしくみは半過去・大過去について先行研究や文法書が指摘するさまざまな用法のすべてに妥当するはずである。それを確認することが次の課題である。

注

\*本稿は、関西フランス語研究会 (2014年12月20日、大阪府立大学) における口頭発表がもとになっている。研究会において貴重なコメントをいただいた東郷雄二氏 (京都大学) と草稿段階で貴重なコメントをいただいた井元秀剛氏 (大阪大学)、大久保伸子氏 (元茨城大学) に心からの謝意を表する。

- (1) 現在スペースと過去スペースの時間幅は一瞬からほぼ永遠までさまざまである。話し手は、過去スペースから見ての過去スペースにいる気持ちになることもあれば、例外的に未来のある場面から見ての過去スペースにいる気持ちになることもあると考えられるが、これについては本稿では論じない。
- (2) インフォーマントはフランス人3人。とくに **Jean-Paul Honoré** 氏 (元 Univ. Paris Est) と **Olivier Birmann** 氏 (関西学院大学) には長時間にわたる調査に応じていただいた。
- (3) たとえば, **Galilée a soutenu que la Terre tournait autour du Soleil.** の話し手は、ガリレオの言動にかかわる場面を想起して、ガリレオがその過去スペースにおいて捉える「地球が太陽のまわりを回っている」という事態を半過去で表している。
- (4) 東郷 (2014) では9つの発話例の出典 (渡邊 2012 ほか) を示している。そして、それら発話例の半過去について「実は『**Je t'attendais.** 型』と総称される用法とは異なることに注意されたい」と述べている。(7) (32) (43) については「現在でもあいかわらず成立している事態を」、(33), (44) – (48) については「未来に成立するはずの事態を」表すという点で『**Je t'attendais.** 型』とは異なる」(p.48) と述べている。しかし、(46) – (48) は、過去スペースにはあるが現在スペースには無い事態を表している。それらの半過去は「**Je t'attendais.** 型」に該当するわけで、「叙想的テンス用法」ではないことになるはずである。
- (5) 未来のある時点より前の出来事 (行為は非完了) を表すときにも前未来を用いることがある (先行用法)。たとえば, **Quand tu la reverras à la rentrée, elle te parlera des romans qu'elle aura lus la semaine précédente.** の話し手は、「彼女が話す時点」より前の出来事を前未来で表している。
- (6) 過去未来のある時点より前の出来事 (行為は非完了) を表すときも、過去前未来を用いることがある (先行用法)。たとえば, **Je savais que, quand elle arriverait à la faculté vers midi, le cours se serait terminé un quart d'heure plus tôt.** の話し手は、「彼女の大学到着時点」より前の出来事を前未来で表している。

#### 主要参考文献

Imbs, Paul (1968) *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Paris : Klincksieck.

Lebaud, Daniel (1993) “L'imparfait : indétermination aspectuo-temporelle et changement de repère”, *Le gré des langues* 5, L'Harmattan, 160–176.

Le Guern, Michel (1986) “Notes sur le verbe français”, Sylvianne Rémi-Giraud et Michel Le Guern (eds) *Sur le verbe*, PU de Lyon, 9–60.

阿部宏 (1989) 「**Je t'attendais** 型の半過去について」『フランス語学研究』23, 日本

- フランス語学会, 55-59.
- 井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』, ひつじ書房.
- 大久保伸子 (2007) 「*Je t'attendais* 型の半過去の表現特性と非自立性について」『フランス語学研究』41, 日本フランス語学会, 1-15.
- 岸彩子 (2014) 「未来を表す現在形 *présent* “*pro futuro*”」『フランス語フランス文学研究』105, 日本フランス語フランス文学会, 183-197.
- 曾我祐典 (2007) 「フランス語における『語調緩和の半過去』」『人文論究』57-1, 関西学院大学人文学会, 71-86.
- 曾我祐典 (2011) 『中級フランス語 つたえる文法』, 白水社.
- 東郷雄二 (2007) 「*Je t'attendais* 型半過去再考」『フランス語学研究』41, 日本フランス語学会, 1-15.
- 東郷雄二 (2011) 『中級フランス語 あらわす文法』, 白水社.
- 東郷雄二 (2014) 「半過去の叙想的テンス用法」『フランス語学の最前線 2』, ひつじ書房, 45-87.
- 西村牧夫 (1985) 「現在にかかわる大過去」『フランス語学の諸問題』, 三修社, 50-62.
- 渡邊淳也 (2012) 「叙想的時制と叙想的アスペクト *Temps de dicto et aspect de dicto*」『文藝言語研究言語篇』61, 筑波大学大学院人文社会科学部研究科文藝・言語専攻, 191-234.
- 渡邊淳也 (2014) 「第5章 叙想的時制と叙想的アスペクト」『フランス語の時制とモダリティ』, 早美出版社, 83-117.